

## 男女平等について

中 三

「男女平等化が進んでいる。」最近、よくこの言葉が定められたことで、女性の労働者の人数が少しずつ増加している。かつては男尊女卑の考えが一般的だった日本で、男性と女性が平等な基準で働くことができるようになったことは大きな進歩だ。しかし、私は完全な男女の平等にはまだまだほど遠いと感じている。その理由は身近なところにある。

毎年のお正月、祖母の家では親戚が招かれて大宴会が行われる。私と家族も毎年顔を出すのだが、私にはいつも気になっていることがあった。その宴会では、男性陣はお酒を飲んでおしゃべりをしたりして大いに盛り上がっている。その一方で、女性陣は食べ物を出したり子供の世話をしたりするなど大忙しだ。そして、みんなが帰ってから洗い物や掃除をし、それが終わるとようやく残り物のご飯を食べている。私も、隣に男性のいとこがいたにも関わらず、自分だけがお手伝いするように命じられた

ことがある。なぜ女性ばかり家事をしなければならぬのだろうか、男性はなぜ家事をしないのだろうか、と疑問に思った。そこで親戚の女性に聞いてみると、

「昔からそういうものだから。」と返された。私は昔からそうだから、という理由だけで女性が辛い思いをすることにも腹が立ったが、女性自らそのことをあきらめているという現状にとっても驚いた。男尊女卑の考えは、今でも深く根付いているのだなと思った。

また、私は自分が差別の加害者になったこともある。私の学年は元氣のよい男子生徒がとても多い。それに比べて女子は落ち着いた性格の生徒が多い。そのためか、授業中に話し合いの場が設けられると男子と女子の意見はよく食い違う。そんなとき私たち女子は決まって、「なんで男子はこのようなふざけた意見しか出せないのだろうか。」と不満を募らせていた。しかし、ある日クラス全体が集まったとき一人の男子生徒が言った。

「女子は男子の意見に聞く耳をもたない。」  
私ははっとした。今までの話し合いを思い返すと、男子の言うことに耳を傾けることはあまりなかつ

た。「男子はふざけたことしか言わない。」という先入観にとらわれて、男子の意見を頭ごなしに否定していた。社会では女性差別がよく問題になっているから、自分は被害者だと思い込んでいたのかもしれない。私は今までの行動を反省し、これからは出された意見は男女関係なく真剣に話し合おうと決めた。

私はこの二つの体験を通して、法律が定められたことで見かけ上は男女平等化が進んでいても、性別による差別はいまだに深く根付いているという現状を知った。そして私たちは男性差別、女性差別に関わらず性別による差別を無意識にしてしまっているということに気付いた。

これらの状況を改善するためには、男性と女性の垣根をなくし、すべての人を一人の人間として尊重することが必要だと思う。今の社会では、男性がすることと女性がすることが分けられていて、異性のことには口を挟まないというのが暗黙の了解になっていくように感じる。代表的な例が家事だ。現在は男性がなかなか家事を手伝おうとせず、女性に負担が重くのしかかっている。男性が家事を手伝わないのは、家事は女性がやるものという偏見があ

るのも一つの理由だが、家事のやり方が分からないということが大きな原因だと思う。異性がしていることに対しての理解が浅いのだ。そこで私たちはまず、これまで異性がしてきたことに積極的にチャレンジしてみるべきだ。その過程で何か分からないことがあったら、遠慮せずに異性に質問してみる。聞かれた方は相手ができないことを怒らず、優しく教える。このようなことを続けていけば、自分がしてこなかった分野のことができるようになり、自分のできることの幅が広がる。そして何より、男性だからこれをする、女性だからこれをするという概念を捨てることができる。

現在の日本人はだれでも性別に対する先入観をもっているのだと思う。しかしそれは多種多様である世界ではもう古い考えだ。「男女平等度ランキング二〇一八」では日本は百四十九カ国中、百十位という芳しくない結果だった。日本国民はこの結果を重く受け止め、男女差別が暗黙の了解とされている現状を一刻も早く改善するべきだ。誰もが社会の一員として、お互いの個性を認め合い、支え合えるような世の中になることを願っている。